

若犬は、此処に住むことに決めた。

その日から、この家の犬となった。

とはいえ彼が家の人たちの手から直接食べ物をもらったり、頭を撫でさせるまでには、まだまだ長い時間がかかった。

姿もなかなか見せなかった。

しかし、それでももう他所へは行かずに、必ずこの家の敷地の何処かにいるのだった。

朝晩、ライラックの茂みの傍らに、犬用のご飯の入ったボウルが置かれ、いつの間にかそれが空になっていく日が続いた。

やがて、だんだんと姿を現すようになり、時折は庭の涼しげな木陰などに、猫といえる大きな黒い犬の姿が見られるようになった。

「フカフカ黒犬さん、あんた図体おっきいんだから、も少し堂々としたらどう？」

三毛猫のモモは、言うことは手厳しいが、この家のことなど細々と教えてくれた。

「いいこと？ 此処んちはテオおじさんとマーサおばさんが住んでるの。それから……ときどきナーヤさんというお姉さんが来るわ」

「ふうん……」

テオおじさん……あの時のスコップを持って立っていた背の高い男のひとである。

そして、ミルクをくれた小柄な女のひと、あれがマーサおばさん。

「ここはね、おっきな材木がたくさんあるのよ。ほら、あんたが隠れてるとこ……あそこに時々材木が運ばれてくるの」

「なるほど……」

「テオおじさんは、おうちを建ててるの。ほら、あそこがテオおじさんの仕事部屋よ」

と、ポーチの中ほどにある建物の扉を示して言った。

節のある木製の扉は上半分の格子にガラスが嵌められ、ほんの少し中の様子が垣間見える。

「新しい製材したての材木って、なんともいい匂いがするのよ、しっとりしてて……」

その時、不意に材木をかついだ男達二、三人が、ふたりの前に現れた。若犬は、慌ててポーチを飛び降りるとガレージの裏に駆け込んだ。

しかし、材木をかついだ大男達は、足早にやってくる犬猫達たちには目もくれず、次々と長い材木を定位置に手際よく立て掛けては、また戻っていった。

ビクともせずにポーチの階に座っているモモは、その姿勢を崩さず、顔だけちよつとガレージの方へ向けて声を掛けた。

「大丈夫よ……出てらっしゃいな」

「もう、大丈夫？　ほんと？……」

「平気よ……。まったく……あんたのほうが、相手がビビるくらいおっきいのよ……。えっと、どこまで話したかしら……」

「材木がいい匂いがするって……」

「……あ、そうそう材木、あたし大好きよ、爪もよく立つし、叱られるけどね……。そう、匂いっていえば……ナーヤさんはね……」

「 ナーヤ…：さん？」

「 そう…：あのひとは、どっか別んどこに住んでて、時々やってくるの。あのひと、いつも絵の具の匂いにするわ」

「 絵の具？」

「 そう、油絵の具…：服とか車とか荷物とか…：。なんか不思議な匂いよ…：」

「 ふうん…：」

その時、再び人間が現れた。

若犬は、また大慌てでポーチから逃げ出した。

そうやって、事あるごとに慌てて物陰に隠れるクロフカに、モモはあきれ返って

「 あんたってほんとに臆病ね…：」

と、溜息をついて笑った。

その人はポーチの階段を上がりながら、コソコソ隠れる大きな黒い犬を眺めて微笑んだ。

そして、扉をノックすると、挨拶しながらテオおじさんの製図室の中に入っていった。

「 やあ、犬飼ったんですか？」

「 ああ…：迷い犬なんだが…：」

「 ずいぶんと、デカいっすね」

「 ああ…：大きいね…：。だが、とても臆病なんだ…：」

「 名前つけたんすか？」

「 ああ、クロフカっていうんだ……」

「 へえ……いい名前だ 」

「 そうかい……」

テオおじさんは、嬉しそうに笑った。

つづく